

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.140

---



---

2019.02.24

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.140 2019.02.24

「Mélange」編集部

詩

4 父たちへ ……………岩脇リーベル豊美 03

    喃語のきらめき……………野口裕 04

l'enseigne lumineuse ……………にしもとめぐみ 05

    ひゅーつと飛んで……………黒田ナオ 06

    たばかり……………大橋愛由等 07

    耳なし……………中嶋康雄 10

    絶対の黎明のために……………法橋太郎 11

黄泉比良坂にまこと無限の光を視るための不可能性のゆらぎ……………富岡和秀 12

    長崎の朝、集平さんに逢う……………大西隆志 14

    光のレーザー—岩元一功追悼……………今野和代 15

書評

立ち読み人の斜め読み (①八上桐子句集『hibi』②樋口由紀子『めるくまーる』)  
……………野口裕 08

連載

神戸詞あしび 129 「ネルーダはロルカの死におおいなる衝撃」……………大橋愛由等 16

編集部日より★59／毎年冬に恒例としている「奄美ふゆ旅」(1/21-24)から帰ってきた。徳之島空港から奄美空港までの飛ぶフライトが機体の不調で運休となり急遽亀徳港から船に乗って大島に向かうことになったというアクシデントに見舞われた。旅の同行者である小説家の高木敏克氏と船中で語り合いながらすごせたので、まあよしとしよう。こうして奄美のヲナリ神たちはわたしに試練を与えたかと思うと、最後には微笑みかけたのである。そのエピソードを語ろう。旅の最終日、昨夜お会いした田端孝之神父に私の詩集などをとどけるために名瀬古田町にある聖アリア教会に出向いたところ、神父が不在だったので、受付の女性にわたしの詩集と『奄美特撰俳句五選・第三集』を手渡したところ、その女性が「俳句をなさるのですか」と聞いてきたので反対に名前を伺ったところ、中村恵美子さんと名乗った。その名前、聞き覚えがあると手に持っていた『奄美特撰俳句五選・第三集』を開いたところ、なんと2018年の年間特選句に選んだ作品(一湾の風をあしらふ海紅豆)の作者であったのだ。その偶然の出会いに驚いてしまったのである。これはまさしくヲナリ神たちと、キリスト教の神の導きであるのだろう。／第140回目例会の第一部読書会では、詩人で歌人の野田かおりさんに「短歌最新情報」を語ってもらうことになった。140回を重ねる「Mélange」例会でも、短歌を扱うのはこれで二回目。われわれの周辺には詩を表現の原基として俳句もつくるひとは何人かいるが、短歌を同時に作る人は稀なのである。(大橋愛由等記)

◆ 4 父たちへ

岩脇リーベル豊美

わたくしには、父と名付けられた人が少なくとも三人(否、四人)いるといつてよい。実の父と義理の父と博士父である。ただ現在生存しているのは九十八歳の義理の父一人のみであるが、この三人にはお互いに何の直積的接点もなく、わたくしがその点上に薄くあるだけである。父というのは象徴的表現で、お世話になったひとということだろうが、男系社会なら四人どころでは済まないだろうし、生物学的には証明できない系図なのである。

一人目は勿論その生物学の実父であるが、その人についてはもう七回忌も済ませ、次は十三回忌になるらしい。今でもその死に方に納得してはいないものの、当時はわたくし自身も遠く離れ呼び戻されてもすぐには行けない状態だったので、発言すらできないと思っていたが、現在は介護士による虐待とか殺人とか終末医療病院の実態も知られてきたし、もつと現状を発言するべきなのた。妹が言うには、やむを得ず行かせたデイサービスに五千円札を持たせたところ、勿論なくなっていたということである。幼稚園児のように名前を書いた靴下やタオルもできる限り高級素材を持たせたので、なくなっていたそうである。何が原因なのかはわからないし、それぐらいしなければ被介護者本人も介護士も生きていけないのだろうか、なぜわざわざ地獄へと赴くか。これも妹から訊いた話ではあるが、最期の日には、元気になったと国際電話をくれるほど、しつかりと手を挙げ訣れを告げたというのだ。後になってあれは訣れの挨拶だったのだと気づくのだが、ひとは誰しも最期には力を振り絞るのか。脳が傷つきそれでも二十年以上生き延びた父は、見舞いに来てくれた同僚たちが先に死んでゆくなかで、生命は脳科学的意志ではないと無言の論証をしていた。英世なのだが、英雄的死とはおおよそかけ離れた残酷で惨めなところの漂泊に、数年に一度の帰国にもほくほく顔で反応していた。東京の学会に出かけるときには、麻痺した舌で「とうひよう行ふの？」と寂しかった。神戸への行き方を母妹と討論していた時も、知っていることを言いたかったのだろう、話し合いに参加していたし、死に目には会えなかったが、訣別の行動がまなかに浮かぶからその死にはまったく違和感がない。

二人目の父は、昨年のクリスマスは最後になるかもしれないかと思いつたにバード・ゴードスベルクを訪ねることとなった舅である。十一月の九十八歳の誕生日には電話でおめでとと言ったが、それにこたえる声は哀しいほど細かった。だが、彼は思いもよらず息を吹き返して批判精神は健在となるのであった。息子が二十歳の時に離婚したまま独り暮らしを謳歌して、カントみために毎日同じ時

刻に散歩するようなベルリン出身のプロイセン人である反面、九十五までは世界中を車で旅し、死ぬ前に戦時中駐屯したルーマニア、マケドニア、ギリシアなどを単独探訪したいとかかなりの無謀をこなしていた。さすがにそれを最後に免許証を返納したもののだが。年末直前までは独りで暮らしていたが、贈られた手押し車で卦蹟き転んだまま捻挫し声も食欲もなく、統合失調症が疑われたけれども、ふたたび世界の中心に戻ってきたようである。目下ドイツ語のできないポーランド人の介護士、そして彼女のクリスマス休暇にはさらにドイツ語を解しない、ブルガリア語をぶつぶついうだけの介護士に住み込んで面倒を看られ、当初一緒に食事もしたくない様子が数か月経ってそれなりに改善した。ボンに首都機能があつたころ存在していた日本食レストラン「上條」はなくなっていたので、本場に暫定都市だったのだと思う。Unbehagenという言葉を実の息子は発したが、世界の中心から離れられなくて百まで生きる意気込みを新たに得たのである。

三人目は十月六日に死んでいたのに、ヴェルツブルグ大学の哲学科のウェブサイトに十月三十一日付で訃報が載り、私をはじめ目にしたのは十一月二十一日だった博士父である。彼は渡独したばかりで何の保証もなかったわたくしを博士課程に受け入れ、それに加えて家族同然にも扱ってくれた。それはバブル最盛期の年で、彼の三人目のパートナーの長女が生まれた年だったから、三十年間わたくしの父でもあったのである。その教えは今も私の哲学のなかに顕現していると思いたい、生前交流のあった、わたくしの配偶者の博士父には、哲学者としてではなく、Anthropologeとして扱われ、それほど悪い意味ではないが、精神分析からの哲学的アプローチを所謂正統「哲学」として認めないところがあり、本人の死後も憑かれたように繰り返す。ここはドイツなので、哲学者どうしの闘いは畢竟泥沼になるとはわかってはいるが、博士義父は一昨年博士義母を亡くし、リュウマチ持ちでチェインスマーカーの彼女が先に死ぬとわかっていたから、一緒に死ぬつもりだったと感性だけでものを言いながら生き残り、寂寥からか以前よりまして頻繁に招かれるたびに、わたくしは我々の哲学の弁護、正当化および健闘をしているのである。

ある日スマホの写真を整理していると、ほんの一年前に「鯨」というレストランを持つホテルで、同じく大病をした日本人同僚が我々を訪ねたときに撮った写真を見し、彼がミュンヘン大学で助手時代に留学したという日本人教授であるが、わたくしは先回帰国時に電話で話したまま連絡がないので、きつと同じように何かあったのだと怖くてまだお伺いも立てていない。

来世の存在を信じていた時代の風習はなくなり、まだ父たちが生まれてくるのだろうか。できの悪い教え子をお許しください。このところは詩的ではなく、即物的語彙で詩うと決めているので、具体的個人を言葉の抵抗とともに時間のアトムまで遡って分析するが、千の間違いを実験で証明しても、観念論的に弁明してみても、苦の記憶は認識できない、父たちよ。

## ◆ 喃語のきらめき

野口裕

一步踏み出せば  
どんと身体が打ち付けられそうな下り坂  
地面は固いアスファルト  
なんとか足を  
奈落へ奈落へと進めて数十歩  
傾斜を吸収して空き地があった

一冬越してまっしろになった  
猫じゃらしが砂地を覆いつくして  
ひとつひとつが  
てんでにしゃべっている

粒あん 死ぬんだよ カラコロ飴  
鏡とダイヤモンド 満ち潮 人見知り  
象は鼻が長い 墨と硯 花まだ？

夕日に照らされると  
はなはだ眩いのだろうが

そちらには大きなマンションが建っていた

## ◆ l'enseigne lumineuse

にしもとめぐみ

闇の中に輝き浮かぶ  
都会の星々

流れて行く光は  
箱形動力形体

遙か遠くまで 辺り一面  
明かりが瞬く  
人工の宇宙だ

黒く見えるのは  
光のなかでは美しい海

都会の人工空間

この広がりには  
幸せな人々のものだ

かつて 確かに見えた だろう  
ワールドトレードセンターからも

アフガニスタンの  
うまれたばかりのこどもたちの何人分のミルクになるの  
だろう

この美しい眺めを  
静かに見続ける 今

※ enseigne lumineuse = ネオンサイン

## ◆ひゅーつと飛んで

黒田ナオ

やって来る  
やって来る  
そろそろやって来るといふのだから  
困ったなあ

夜の窓をのぞくとうろついている  
歩くのが下手くそで  
あつちへふらふらこつちへふらふら

墓地に寝ころがって  
冷たい地面にじつと耳を押しつけて  
足音を聴いている  
もう死んでしまったのかな

いや まだまだ死にきれないと  
重低音で唸っている

なんだか何もかも放り出して  
旅に出てしまいたくなるよ

哀しくて  
ちよつとだけ誇らしい

夜空を見上げてみると  
突然ぴかっと光ることがあつて

それこそが彼のマント  
空いっぱい  
月や星々といつしよに  
流されて

それがいつだつて薄汚れた影まで引きずっているものだから  
今夜もなかなか眠れなくて  
眠れないくせに  
もぞもぞと

半分 夢の中にいる

## ◆たばかり

大橋愛由等

雲を食べすぎた魚の欠伸が止まらない

（暗闇にひそんでいた渡り鳥と凍蝶とがどちらから先に世間に出ていくかなんども顔を見合わせながらも決めかねている時、さよさよと通り過ぎて行く赤紫が水底に沈んだへ短調をいとおしみながら口笛を吹いている姿にはたと気づいたところで、木曜日の地域の公民館の椅子という椅子が座ることを拒んでいると書かれたM駅の伝言板を思い出し、壺の中に溜め込んでいるへ切り売りされた永遠の売価が気になる廃村周りの商人に耳打ちしようとして、つまようじをいつも持ち歩いている石人にひと月前に借りた詩集『新月を呑み込んだ蛇たち』をそろそろ返そうかと思つていた。湿った壁に寄り添つていた季節風が自分たちの季節がいよいよ終焉に近づいていることをゆらゆら揺らめいている通りすがりの少女の髪飾りから察知して、「ぎのうあなたが拾った光の束のなかに寡黙な叛徒が入り込んでいます」と伝えようとしてフェニックス通りを海にむかつて歩いていると三代前は海亀だったという男とすれ違い「その光の束はへ甘い水」という名前の町の叛徒が隠し持っている」と言われたので、破船したばかりの漁船の舳先が向いている方が異教徒たちの集まるパティオだったことが判明し、叛徒たちの旗をみせびらかせようと冬の街を歩きはじめた。傾斜のゆるい坂道がつづくその界限は沈黙を拒んだ街路樹たちが無風な月曜日でも互いの嘘を自慢しあつていて、舗装されていな

い道の割れ目から叛徒たちが暗唱していた光の束がちらちら拡散して野の草としてそこかしこに根を張ろうとしていることに気づいているのはへ甘い水への町に住む誰なのだろうか。

# 立ち読み人の斜め読み

野口裕

## ▼句集『hibi』（八上桐子）

不思議な句集である。どの句も練れており水準以上の出来具合を示している。句の印象も後味良く好ましい。では、句集を代表してどれか一句となると、どの句もすうつと後景に霧散してゆく。

おそらく、句の成り立ちがおりに触れての喜怒哀楽を記すのではなく、感情が立ち上がる寸前の心理的な揺らぎを留めようとしているためではないか。その観点から拾ってみると、

降りてゆく水の匂いになってゆく

いちじくはつめたい夢を見続ける

走り出すちいさく一度揺れてから

ねむたげにオカリナの口欠けている

アサガオノカスカナカオスガシカオ

ものがたりとして横たえるからだ

歩いたことないリカちゃんのふくらはぎ

ストローなからだながれるうりーど

やくそくは水でゆわえる水の束

とめどなくさかなのからだからしずく

など、たちどころにまとまつた句数がたまつてしまう。漢字表記（真名表記と呼ぶべきか）を避けて平仮名、片仮名表記が多用されるのも、上記の観点から見ると、ごく自然な成り行きと言えよう。句の中にある感情は、萌芽としてあり淡い。しかし、発芽を促す生命力が横溢するさまは誰の目にも明らかだろう。

句集や詩集などの読み方として、一冊を通読するのではなく、おりに触れてばらばらとめくって気に入った詩や句を読むやり方がある。そうした読み方が『hibi』には合っている。

一冊を通読して後にこそ、そうした読み方は成立するのではないかと一瞬疑念も残るが、それを尊重しないかぎり、一冊の部分が拾い出されてアンソロジーとして新たに生まれ変わりの読者を獲得する、詩や句に特徴的な機構の動力を認めることはできないはずだ。もしも現時点での川柳アンソロジーが編まれる場合、八上桐子の作

品は外せない。だが、アンソロジーに入集された句が『hibi』に置かれたときよりも輝いて見えるとき、句集が句の貯蔵庫以上の働きを示していないことになる。そうした疑念が当方になどとは言えない。誤読であることを願うばかりだが、その機会は今後の展開に譲るとする。

## ▼句集『めるくまーる』（樋口由紀子）

つまづく句集である。冒頭の  
ちようど来た鯛 ちようど来る正月  
で、いきなりずっこける。

日本の歌や句の歴史の中で、満ち足りた幸福に包まれた瞬間を歌い上げるものは少数派に属する。曲調でいえば、マイナー（短調）に対するメジャー（長調）になるわけだ。メジャーの方が少数派なのである。川柳の例では、田安宗武（八代將軍吉宗の次男）作と伝えられる句に  
けいさんが袋に入るとかんがえ  
がある。書き物をやめようと、けいさん（圭算：文鎮の意）を袋に入れたら酒の爛がちようど出来上がった。要するにグッドタイミングだったという話である。

句の巧拙はさておいて、このような満ち足りた状況を作するのは難しい。高浜虚子の

咲き満ちてこぼるる花もなかりけり

などは、奇跡的にうまくいった例に属する。

冒頭の句では、「ちようど来るお正月」ではなく、「ちようど来る正月」として五七五のリズムに乗るところを、あえて下五を四音にすることで変則性を際立たせる。よほど珍しいことだったんだろうと思わせることができれば成功だが、どちらかというと鯛と正月の幸福感が勝るあたかも、

この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば  
と、道長を連想してしまふところまで幸福感は勝手に上りつめる。そのへんが、巧拙を超え、好悪によって句が見られてしまうことになってしまふ因ではないかと、ひねくれた読者は考えてしまふ。

思えば、前句集『容顔』の代表句とされる、  
式服を山のかなたに干している

にも、そこはかたない幸福感が漂っているな、などと余計なことを思い出す。

しかし、余計なことを思い出したおかげで、樋口由紀子の通奏低音はメジャーであることを再確認した。前句集では、  
念のためフランス人形差し上げる  
哲学は桃の缶詰開けるとき

つぎつぎと紅白饅頭差し出され

アフリカの王ならくよくよはしない

満開の桜をさらに追いはらう

シーソーの片方に置く亜熱帯

しあわせはグリコのおまけ転がして

南から桃売りがくる午後の部屋

アルバムは燃やしてしまえ遠花火

筆筒の隙間が鏡に映る祝詞かな

婚礼布団のすみっこにあるふくらし粉

引き出しの赤いえのぐはかくや姫

真っ白なハンカチ落とす葱畑

等々、そうした目で見た句を拾い出すのに苦勞はしない。今回の句集でも、

ぎやまんのまんなかへんがきつと犬

夕方は斜めに立つといい気分

鋸を使っていたらバスが来た

はらわたのビー玉行ったり来たりする

アフリカのダンスをしよう鳥が来る

自転車で轆くにはちようどいい椿

指物師が駆け抜けていく芋畑

缶の蓋見つからなくて美しい

さいころの6がでるまで金曜日

時々はローマ字で書くY U U E T U K A N  
やはり、多くの句を拾い出すことができる。

## ★大橋愛由等の句集『めるくまーる』10句選

なりゆきで寂しくなった楕円形

困惑を眠らせている金盞

夏空は躊躇の意味を教えない

細長いガラスコップに入れる鬱

まつさきに閉じてしまえば父の青

恣意的に弁当箱は右に寄り

雲海に兎と亀が入ってゆく

最後に、選んだ句を写しながら思ったのは、表記の揺れである。平仮名である方がふさわしいところが漢字になっていたり、送り仮名が句の雰囲気にながわなかつたり、あるいは選の最終句のようにどんぴしやりと填まっていたりと一定しない。それも、面食らった一因だろうか。

指物師が駆け抜けていく芋畑

なにもない部屋で卵を置いてくる

ビニールの靴の底にはニヒリズム

（わたしの選句基準は、詩的飛躍がなされている作品であるかということに絞っている）

## ◆耳なし

中嶋康雄

耳が無くなって  
夜がやってこなかった  
キノコは乾き  
空に浮遊していた  
ときどき毒を落とした  
耳があった部分が  
透き通っていたので  
脳が見えた  
光っていた  
思い出は  
幼い頃に作った砂山のトンネルのこと  
ふたりで両端からほじくり進めたトンネルは  
貫通することはなかった  
頂上がぺしゅと崩れてそれで終わり  
隣で見ていた目の大きな宇宙人が笑った  
ので  
殺して埋めた

遺体を取りに来た円盤が  
砂山をシュッと過ぎた  
トンネルは貫通した  
耳はもう生えてこないのだと  
諦めた  
悲しかった  
耳が無かったので  
面接官は露骨に厭な顔をした  
どこにも就職出来なかった  
蠅と妖怪にたかられ  
透き通った部分を  
ペロペロと舐められた  
電気が走らなくなり  
ぼんやりしてしまった  
耳がない上  
ぼんやりしていたので  
誰からも相手にされなくなり  
ひとりで  
また砂山をつくった  
やつぱり  
夜は  
やってこなかった  
宇宙人ももうやってこなかった

コオロギみたいな  
地底人がいた  
ごみ屑の  
悲しかった  
地底人の耳は  
脚に並んであった  
耳はちよこちよこ逃げ  
脳は小さかった  
頭をクルクル回すと  
乾いた音がした  
音は錆び  
触覚が風邪に揺れた  
逃げるそれを踏み潰した  
変な屁をして  
それは死んだ  
潰れた腹から  
黒い針金が出てきて  
空を見上げた  
乾いて  
立ったまま  
いつまでも  
なんにもなかった

## ◆絶対の黎明のために

法橋太郎

天翔けるすべての希望の鳥を地上に落とす。  
すべての絶望の列車を脱線させる。おまえ、  
絶対の女よ。希望も絶望もないところからお  
まえを守るおれという絶対者。ヒンドゥー  
の神シヴァさながらのちからのもとにこの夜  
の都會でおまえのすべての曖昧を真裸にする。

おれは破壊音の心地よさを味わうために高く  
舞いあがり俯瞰する一羽の終末の夜の巨きな  
鳥となる。不生のちからを得てすべてのおま  
えの比較の意識を葬らせるためにおまえの手  
の指のひとつつづつを確かめる。ふたりでひと  
つの胸となつておまえの高鳴る鼓動を拉致す  
る。

合格も不合格もない。右も左もない。おまえ  
を絶対の女とするためにこれらの通過儀礼を

行わしめる。いまは何も考えなくてよい。い  
らない考えに動かされることなくするとき  
おまえはおまえにとつてのその自由をとりも  
どす。地獄でも極楽でもあるこの夜の都會の  
なかでおれたちがそれぞれ絶対者となるのだ。  
さらにその絶対者という意識さえも撃ち殺す。  
希望も絶望もないところで絶対者は神をも仏  
をも撃ち殺し、おれたちはかねあうことのない  
いそれぞれの夜をひとつのいのちとして支配  
し支配されるのだ。絶対の夜。絶対の朝。そ  
の胸の満潮と引潮のあわいの絶対の黎明を黎  
明のその蒼さのまま奪いとるのだ。

おまえ、絶対の女よ。この黎明におまえとお  
れは他に類を見ない絶対のくちづけをもつて  
抱き合う。抱きしめられたおまえの重力をふ  
たりでひとつの重力とするために。夢見るお  
まえのその夢をふたりでひとつの夢としてお  
まえをこの地上から浮かべ、その浮力をもつ  
ておれの夢もわずかにこの地上を離れる。離  
されることのないおまえをつよく抱きしめた  
まま。

## ◆黄泉比良坂に一と無限の光を視る ための不可能性のゆらぎ

富岡和秀

絶望の夢幻街に、或る女／或る男が佇んでいる。或る女の作り出す卵子は生死の境を彷徨う。或る男の生み出す精子はどうしても聖性を胚胎しない。紆余曲折の彷徨と遍歴を想起すると、この或る女／或る男のアマルガムである中性者は息をふっーと吐き出し、この疲弊したパラドックスによってもうひと息で最後の砦を超えられるのだと思念する。

山の向こうに微かに見えるのが伝承で聴いているアミダかアミナダブだろう。不可解な遙かな領域に浮かぶ影。過ぎ去りし彷徨の街で転位と流動を重ねてのち、殆ど全てを捨て去ることによって、今この五十三番目の磁場に到達寸前だ。この峠を越えれば、黄泉比良坂へ光りながら入場できるだろうと不確かな想いを抱く。しかし磁場の極は、想いが不確かなだけに刻々と移動している。

に見たのは小豆が光る姿だ。スプーンの手を止めてじつと見ると、五十二個の小豆の餡がやはり光っている。凝然として膝を打ち、忽ち「或るもの」はこの小豆の餡の光を飲み干す。これで五十二回の山は超えた。魔法のぜんざいを食べることによって五十三番目が残されるだけだ、と想いながらカフェの窓外を眺めると山の向こうにアミダのような形をした雲が流れていく。その方角をじつと見るとやがて谷間に雨を降らすのが見える。「或るもの」は五十三番目の救済場が山越えの谷間にあると示唆され、その鉱脈を探究することとする。谷間の場はさらに深く地に沈み込む。あたかも意識の下のマグマのような戯れの場所かもしれないと思ひます。「語りえないことは沈黙しなければならぬ」に抗して深みにある意識以前のマグマの場を探究することだ。そこにこそ五十三番目の救済場があるはずだ。「或るもの」ソノモノが光るメソッド、それがそこに眠っている。そして「或るもの」の顔は今ここで童である。食べた五十二の餡は中性者の体内で謎の魔法果を生み出し、一から五十二まで、あたかも地獄、煉獄から天国までを経めぐり、五十二の聖山を通過する。あるいはミクロコスモスを妄想的に駆けめぐる種々多様な多声音を奏でる。多声音はドレミファソランドという規矩とした音ではない。ある時はオペラ、ある時は声明、ある時は演説の声、ある時は蘇った屍体の骨音、ある時は未開部族の舞踏音、ある時は深海流の音、ある時は胎内のおぼく音のような音、ある時は隕石の落下する際の衝撃音、およそあらゆる音の群れの集合である。

夢幻街から帰還し、夢から醒めると、中性者は自分が男か女かという平板な意識はなく、ただ単に「或るもの」として有るだけという夢の中の人格に共振している。覚醒するというのは「夢の中」と「夢から覚めた場」のシンクロニシティを意味するのかと「或るもの」は感じながら、ふっーと息を吐く。五十三番目の場所はどこにあるのかと思ひながら、夢から醒める前にも吐息をついたという記憶が蘇る。その場所は吐息の記憶の在り処を探れば特定できるだろう。その記憶が出立したと覚しい場はアミダかアミナダブがもう少して顕現すると覚しい場だと想起するが、それが何処にあるのかは不明だ。かつて「或るもの」が絵に見た山越えアミダの図は想像で描かれたに過ぎない。あれは理想的救済者の観念図だろうと「或るもの」は思念する。アミナダブを見たものもない。伝承に基づいて、遙かな過去に生存していた祖の源と聴いているだけだ。救済観念とは「或るもの」が想像しているだけに過ぎないのではないか。アミナダブとアミダがこの場に光りながら現れると思うなら、「或るもの」の救済場が仄かに今ここに現れるはずだ。しかしそもそもアミダが黄泉比良坂越えに介入して救済するのだろうか？

そう思いながら、ひと息つくために、街路をしばらく歩きやがて、カフェ「ホウゾウ」に入つてぜんざいを注文する。甘いものも少しだけなら頭を休めるには良いだろうと感じ、スプーンでぜんざいを掬いとりとうとする。その時「或るもの」がぜんざいの中同時に五十三番目の絶嶺に駆け上がる前に中性者は唯一人で見えない儀式を行なう。研ぎ澄まされた刃のように覚醒して、二百年ばかり前に平和裡に村の死を死んだ祖の祖を憑依の中で葬送し、一九四五に激戦地オキナワで若い死霊となった祖を瞑想の森で葬送する。葬送の供物は彼方の呼び声がかじめ用意する仮面の生命であり、アミナダブの似姿だ。これが五十三番目の場に磁気を与え、山越え成就に資そうとするだろう。

儀式の渦中で黄泉比良坂が光り、仮面も光を発する。「或るもの」は、この仮面の生命を呼び声から与えられる。贈与の瞬間、「或るもの」の顔は仮面に変容し、身体は光る光体となる。いまひとつの仮面であるアミダの沈黙の声が内なる耳に届く時、闇に光る補陀落山擬きの場を越え、光る仮面の生命は黄泉比良坂に入場する。その入場とともに、仮面の生命に付き従う微細サトルボデイの身体のようなものが、微細な光りを放ちながら振り返りもせず黄泉比良坂へと消えていくのである。

しばしのち、磁場の極は坂の途上と推定される場で極めて強力となる。「或るもの」が仮面の生命に変容して消えた場を聖化したかのように。

## ◆長崎の朝、集平さんに逢う

大西隆志

海からの風が吹く  
坂道を駆け上って  
微かな熱を帯びる  
スニーカーの赤と  
パンツの黄を染め  
時間は巻き上がる  
ニッパで切った  
ギターは弦のよう  
傷付けるのは景色  
湾の奥へと辿ると  
川を遡行する視線

一瞬の永遠は誰か  
映像に閉じ込めた  
丘には吊るされた  
名を奪われた影に  
鳥が急降下しては  
言葉を啄ばむのだ  
舟の舳先に翻る旗  
外海に沿って下る  
家族の車の音楽は  
沈む夕日に溶けて  
語りは自らの団欒

たくさんの死には  
墓石の日付が入口  
歩みを重ねながら  
長谷川さんの背は  
湾を背負っていた  
相生湾と長崎湾に  
工場内の機械類は  
少し錆が浮き出て  
半島から渡った人  
朝の国の家族へと  
口遊む旋律を送る

## ◆光のレーサー ―岩元一功追悼

ほととぎすそのかみ山の旅枕ほの語らひ  
し空ぞ忘れぬ

今野和代

星あかりの道を  
跳んだり はねたり 踊ったり  
轟きながら 歌いながら  
ぎぼうし揺れる薄紫の夜明けの光 探してた  
すとんと この世の忍苦や飢えや問いかけを  
その大きな暖かい背中から降ろして  
野たれ死にの夢や 呆けていく明日のうつ  
ろを  
カラカラケタケタ 笑いとぼして  
三日月の透きとおる舟にひらり飛び乗った  
かと思うと  
矢のような速度で

「またな じゃあ バイバイ」つていなく  
なった 一功さん  
野原の箒草のように ザワザワ 取り残さ  
れてしまったよ

うちら永遠の子供になって

宝探しの旅に出よつて  
かっちゃんや 秀島さん 塩山さんや  
コーヒー 北村さん  
捨て猫や武田さん ダンサーマリーも誘  
つて

宿無し犬も連れて 七色の羽の賢い鸚鵡  
を肩にとまらせて  
ブルースの旋律 光のレーダーにして  
ビンビン ツンツン 背中を反らしながら  
まだ イケる まだまだ いける これか  
ら おもろなるつて  
暗い水 ごくごく飲み干し  
ラアラア うたいながら 立ち尽くす怖さ  
も 独りぼっちの  
カナシミも蹴散らかして 一緒にいくは  
ずやなかったんか

ほんのつかのまのセッションやったね  
野太くて チャーミングな一功さんの声  
揺れる嵐の夜の

カンテラになつて暴れながら灯つてた

戦いの雄叫びみたいに遙かまで響いて  
裸形のかたちで  
ひとりブルブル震えながら ときには  
しおん色の空を陽気に跳ねてたブルースハ  
ープ

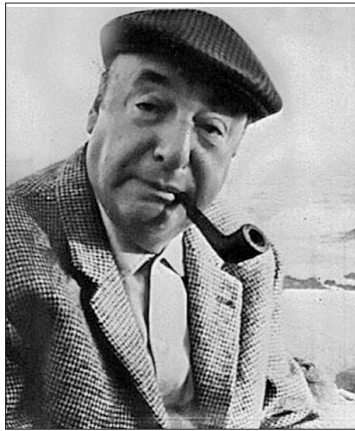
その物語 その色とりどりの  
ランタンみたいな熱い胸に  
ぞっこんやったよ うちらは  
忘れないよ だから どこまでも  
すすめ 岩元一功 光の  
レーサーになつて  
抜けてけ

マリアの  
ベッドまで



# 神戸詞あしび

129-2019.02.24 大橋愛由等



パブロ・ネルーダ

市民戦争が勃発。ロルカは同年8月故郷グラナダで銃殺されてしまう。ネルーダも同年領事職を解任され、パリに渡っている。ネルーダにとってロルカの死と市民戦争の現実は大いなる衝撃であった。翌37年にはパリで「スペインを救済するラテンアメリカ人グループ」を結成するなどス

ペインの市民戦線派に連帯のメッセージを送り続ける。しかし歴史は逆回転する。39年に市民戦争が終結（今年2019年は戦争が終結してちょうど80年になる）。以後、永い間フランコの独裁政権がスペインを支配することになる。ネルーダはフランコのスペインを訪れることはなかった（共産党員だったという政治的理由もあるが）。戦争終結後、市民戦線派について闘ったひとたちはフランコの弾圧をさけてラテンアメリカの諸国に亡命するひとが多かった。メキシコは多くの市民戦線派の市民を受け入れ、亡命スペイン人が集住している場所もあることは知っていたが、「スペイン人移民担当官」に任命されたネルーダもチリへスペイン人を送り出している。ロルカはネルーダを「哲学よりも死に近く、知性よりも苦悩に近く、インクより血に近い詩人」と評している。一方のネルーダはこう応えている。「かれは、ギターのように、大衆的であった。子供のようには、人民のように、陽気であり、淋しがりやであり、奥深くで、明らかなった。ひとつの象徴を犠牲に供するために、誰を犠牲にしたらいいか。隅すら隅へ、一歩一歩 苦勞を重ねて探しまわったとしても、どんな存在、どんな対象のうちにも、ここに選ばれた者のうちにおけるほどに、澁刺深奥なるスペイン人民の魂をみつけだすことはできなかったらう。」（大島博光著『愛と革命の詩人』大月書店「国民文庫」）

## ネルーダはロルカの死におおなる衝撃

その詩人、映画の素材になりやすいのかもしれない。パブロ・ネルーダ（1894-1972）。チリのノーベル賞詩人である。逃亡生活をいくどか経験している。1月15日に観た映画「ネルーダ 愛の逃亡者」（パブロ・ラライン監督、2016）に触発されて、映画を観たその日にジュンク堂書店で『ネルーダ詩集』（田村さと子訳・思潮社「海外詩文庫」）を購入。解説部分をふくめてすべて読了した。ネルーダは当時のラテンアメリカの知識人がたどった系譜にのっとって、海外のチリ大使館に赴任する道をえらぶ。1934年にはスペイン・バルセロナの領事として着任。翌35年にはマドリードの領事となる。その時にフェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898-1936）と出会い交流を深める。ふたりは同時代人だったのだ。ロルカはネルーダを熱狂的に迎え入れ、マドリードで朗読会を開催し、ラテンアメリカの新しい声として紹介していた（前掲書・訳者解説より）。ところがその翌36年にはスペイン市民戦争が勃発。ロルカは同年8月故郷グラナダで銃殺されてしまう。ネルーダも同年領事職を解任され、パリに渡っている。ネルーダにとってロルカの死と市民戦争の現実は大いなる衝撃であった。翌37年にはパリで「スペインを救済するラテンアメリカ人グループ」を結成するなどス

ペインの市民戦線派に連帯のメッセージを送り続ける。しかし歴史は逆回転する。39年に市民戦争が終結（今年2019年は戦争が終結してちょうど80年になる）。以後、永い間フランコの独裁政権がスペインを支配することになる。ネルーダはフランコのスペインを訪れることはなかった（共産党員だったという政治的理由もあるが）。戦争終結後、市民戦線派について闘ったひとたちはフランコの弾圧をさけてラテンアメリカの諸国に亡命するひとが多かった。メキシコは多くの市民戦線派の市民を受け入れ、亡命スペイン人が集住している場所もあることは知っていたが、「スペイン人移民担当官」に任命されたネルーダもチリへスペイン人を送り出している。ロルカはネルーダを「哲学よりも死に近く、知性よりも苦悩に近く、インクより血に近い詩人」と評している。一方のネルーダはこう応えている。「かれは、ギターのように、大衆的であった。子供のようには、人民のように、陽気であり、淋しがりやであり、奥深くで、明らかなった。ひとつの象徴を犠牲に供するために、誰を犠牲にしたらいいか。隅すら隅へ、一歩一歩 苦勞を重ねて探しまわったとしても、どんな存在、どんな対象のうちにも、ここに選ばれた者のうちにおけるほどに、澁刺深奥なるスペイン人民の魂をみつけだすことはできなかったらう。」（大島博光著『愛と革命の詩人』大月書店「国民文庫」）

詩と評論 月刊「Mélange」Vol.140 神戸	2019年02月24日 通巻140号 発行所/月刊「Mélange」編集部 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F 編集・発行人/大橋愛由等（「Mélange」同人） maroad66454@gmail.com 定価 600円(税別)
----------------------------------	--